天理教学から家族問題を考える

前おやさと研究所長
深谷　忠一　*Chuichi Fukaya*

家族ということに関しては、原典Ⅰ「おふでさき」においては、第1号に、教祖の長男の秀司様の結婚がテーマとして出てきます。そして、第17号の最後に、中山家の親族について1首だけ出てきます。

原典Ⅱの「みかぐらうた」では、第二節で、「このよのぢいとてんとをかたどりて　ふうふをこしらへきたるでな　これハこのよのはじめだし」と歌われています。また、四下り目の二ッや、十一下り目二ッに、夫婦について歌われていますが、家族について具体的に語られているところはありません。

原典Ⅲの「おさしづ」には、家内、家業、親、親々、親子、親兄弟、親子兄弟、親子姉妹、兄弟、姉妹、姉弟、夫婦、親族、親類等、家族に類似の言葉が出てきます。家族という言葉も割書などに出てきますが、そのテーマのほとんどは、地方の家族がおぢばへ移り住むことについてです。他の類似語でも、一対一の対人関係の治まりについての教示が主になっています。

このように、原典においては、“理想の家族の姿”とか、“家族の幸福の有り様”というようなことについての言及はほとんどありませんが、夫婦、親子、きょうだいの間柄の問題―心の使い方・治め方についての教示は多く出てきます。個々人が自らの心のそうじをして心を勇ますようにすると共に、身近な人間関係をいかに治めるかが、信仰生活での大きなテーマとして取り上げられています。

一方、「教祖のひながた」から家族について考えてみますと、

1．中山みき様は、教祖になられた時、家庭の主婦であった。
2．親神の「第一声」は家族に対してであった。つまり、天理教は、中山みき様の神への承諾・神的立場の自覚が最初ではなく、夫・善兵衛様や家族・親族が親神の要請を受諾することが最初に問われた。
3．教祖は世俗を離れて山の中に入るようなことはなさらずに、あくまでも中山家の家族と共に俗世界での生活をしながら、神の道を貫き通られた。
4．その中山みき様が教祖になられた後の家庭生活は、大変な苦難の連続であり、皆が思い描くような幸せな家庭とは程遠いものだった。
5．そして、その教祖の道すがらは、家族があったがゆえに厳しさが増した。
6．しかるに、一方、教祖が、親として、秀司やおはるの出直しを悼み、祖母として孫たちをも可愛いがられた姿は、『稿本天理教教祖傳』や『稿本天理教教祖伝逸話篇』、また、『稿本中山眞之亮伝』の中からも読み取れる。
「我が子も先にたて、楽しみも先に立ち」という意味のおさしづがあるが、これは、“本来手にできるはずの幸せを放棄した”ということである。つまり、それは、家族を持ち、家族団らんの生活を求めることは、普通の人間の幸せの条件であり、基本的には否定されるものではないことを示している。
7．ところが、現実の姿としては、教祖のご家族では、いわゆる逆縁が発生し、家族団らんの楽しみもなかった。その理由は、中山家のご家族が、この世始めの時の道具雛型の魂を持った方々であり、その人たちがこの世に現れたのは、元初まりの時の親神の働きを今の世で再現するためであったからある。それで、その親神の期待、求められている役割・立場への取り組み方いかんが、中山家の家族一人ひとりの一生のあり方に現れた。つまり、各々のいんねんに基づいた役割を果たすことが、個々人の幸せの追求に優先されたのである。

というような事が列挙できます。

この教祖の“ひながた”が、家族と共にあったという点から思案して、「人は皆、家族を構成し、その中で信仰をするのが、人間としてのあり方である」と考えるのが、家族についての天理教的立場であると言えましょう。

また、「おさしづ」では、

「たすけ一条には、内に一つの理を無けらいかんと、一つに家業第一、内々互いに大切の理を分かれば、内々睦まじいという理を分かる。内に誠となれば、世界から見ても、若きと言えども、あれが理いかいな、と、分かり来る。」（補遺21・1西岡善造22才願）

「日々家業第一盡すの中に理をある。幾日参らんさかいにと言うても構わん。日日家業の盡す中に一つの理をある。日参に受け取る處もある。」（補遺明治21年2月3日萩原治兵衛伺）

と、“家業を大事にして内々が睦まじく通るのがたすけ一条のための理作り”であり、また、“家業に尽くすことは神への奉仕（日参）と同じ理に受け取る”と言われています。

つまり、人間が一つの家族を構成するのは、その家族がそれぞれに果たすべき役割・家業があるからである。そして、一つの家族の構成員は、その家族が“よふきぐらし世界”を実現するために果たす役割・家のいんねんの一端を担う人たちなのである。同じいんねんの者どうしが寄って家族を構成し、その“与えられた家族の役割を果たすことに自らの幸せを見つけるべしである”というのが、「教祖のひながた」に学ぶ天理教の家族観でなかろうかと思う次第です。